教育観はいかに語られたか
－理工系研究室の教員に対するインタビュー中の「冗談」に着目して－
How Views on Education Were Discussed: Focusing on “Jokes” during the Interview with a Faculty Member in the Science and Engineering Laboratory

福良直子, 大阪大学
Naoko Fukura, the University of Osaka

1. 背景と目的

理工系研究室でのコミュニケーションを対象とした先行研究では、留学生が研究活動を円滑に進めるためには、研究室の環境とサポートが不可欠であると指摘されている（居關・生天目 2023、重田 2008、村岡 2003 等）。しかし、その実態は十分には明らかにされているとは言い難い。そこで、福良（2024）は、特に留学生のアカデミックプレゼンテーションに対する研究室のサポートに着目し、異なる理工系研究室の教員 4 名に対してインタビュー調査を行った。その結果、教員による直接的な個別指導に加え、教員がファシリテーターとしての役割を果たし、学生同士のサポートやコミュニケーションを促進している様子が明らかとなった。また、教員は留学生の日本語の到達度を把握した上で、指導の目的に合わせた使用言語の選択をしていた。部分的にでも日本語を使用することは、コミュニケーションの質的向上と範囲の拡大、新たな視点の獲得や理解の促進等、研究活動におけるコミュニケーションを深めるものとして捉えられていることがうかがえた。

このように各研究室のサポートの実態の一側面が明らかになった上で、それらのサポートを生み出す教員の「教育観」を把握するためには、教員の個別の語りをより詳細に分析する必要があるものと考えられる。本稿では「教育観」を教員が教育の目的や意義、学習者との関係性について有する信念と定義する。

また、ホルスタイン、ジェイムズ・グブリアム、ジェイバー（2004）、やまだ（2006）等で述べられているインタビューの相互行為性の視点を取り入れ、インタビューをインタビュアーとインタビュイーが協働で意味を構築するダイナミックな相互行為のプロセスとして捉える。

本稿の目的は、日本の関西地区にある某大学の理工系研究室に所属する教員一名に対するインタビューにおいて、教育観がどのように語られたのか、相互行為としてのプロセスを通じて明らかにし、理工系留学生への指導およびサポートに関する新たな示唆を得ることである。

2. 調査の概要

本研究の調査協力者は、関西地区の某国立大学の理工系研究室に所属する教員一名である。個人情報保護の観点より以下では教員を X と表記する。機縁法により、常に複数名の留学生が所属している研究室の教員として協力を得た。書面および口頭により、調査協力に対する許諾を得ている。調査時に、X の研究室には留学生が 8 名所属していた。研究室の特定につながる情報のため、内訳ついては

明記しないが、在籍段階は、研究生から博士前期、博士後期課程の学生であり、留学生より多くの日本人学生が在籍していた。

表 1　調査の概要

調査時期	2022 年 11 月～12 月
調査協力者	関西地区の某国立大学、理工系研究室所属の教員 X
調査方法	事前アンケート＋オンラインインタビュー（約 50 分間）
分析方法	エピソード単位に切片化、「冗談」に着目して分類

表 1 は、調査の概要をまとめたものである。2022 年 11 月に行った事前アンケートに基づき、12 月にオンライン（Zoom）により、約 50 分間の半構造化インタビューを実施した。事前アンケートの調査項目は、研究室において留学生が行うプレゼンテーションの種類、プレゼンテーションの使用言語、プレゼンテーションに対するサポート、サポートの際の困難点、留意点などである。インタビューは、録画および録音を行い、文字化したものをデータとしてエピソード単位に切片化し、観察された 20 箇所の「冗談」に着目して分類を行った。

3. 結果と考察

3.1　インタビュイーによる冗談

本稿では「冗談」を「ユーモアを含む意図的な言語行動」と定義する。ユーモアによる効果は、発話の状況に応じて変化するため、単一の尺度では捉えきれないものと考えられるが、人間関係や社会的動機に焦点を当てた上野（1992）の分類を参考にし、遊戯的、攻撃的、支援的ユーモアに分類した。遊戯的ユーモアは、楽しさや面白さを共有するもので、攻撃的ユーモアとは、からかい、皮肉、風刺を含むものである。また、支援的ユーモアは、励ましや緊張を緩和するものとされている。X による冗談は計 20 箇所観察され、その内訳は遊戯的ユーモアが 13 例、攻撃的ユーモアが 5 例、支援的ユーモアが 2 例である。なお、支援的ユーモアの 2 例は、いずれもインタビューの進行に関する場面で用いられていた。

3.2　教員Ｘによる冗談に対するインタビュアーの反応の変化

インタビューの進行に伴い、これらの冗談に対して、インタビュアー（筆者）の反応に段階的な変化が見られた。初めは、インタビュアーはＸに冗談を言われても特に反応することなく、次の質問項目を尋ねるなどしていたが、次第に冗談の一部を繰り返すようになり、やがてインタビュアー自らも冗談を言うようになっていった。そして、このようなインタビュアーの反応の変化に伴い、X の教育観がより詳細に語られる様子が観察された

以下、インタビューデータにより具体的に述べる。インタビューデータ（1）は、研究の理念の重要性について述べられている箇所である。データ中の番号は発話番号であり、X は教員 X を、R はインタビュアーを指している。

インタビューデータ（1）

138X　それ（※コンセプトマップ）が学生さんの羅針盤になっていきますので、羅針盤になると同時にそこから先、うちの研究室を飛び出してもらわなあかんので、それを延長線上にみんなのそれぞれの学生さんの新しい領域につながるような、そういうのをちょっと意識しながら、ここから先は俺、知らんでっていうか、ここまで面倒見るけどっていうようなことそれを言うようにしてます。ダジャレを混ぜながら。
139R　ダジャレ。もう本当に素晴らしいです。（後略）
140X　きれいごと言ってるだけですよ、もう。
141R　本当に手厚く愛情を持って。
142X　愛情ありますね。
143R　愛情ある。かわいい、かわいいしていただけてる。
144X　愛情あります。もうかわいい、かわいいしてますよ。
（中略）
179X　今、ドクターをとにかく育てたいと思ってまして、（中略）技術っていうのは、新しい技術生まれても、すぐ新しい技術で置き換わっていくんですけども、理念っていうのは、もう全然、置き換わらないもんなんで、自分のものやったら。そこをしっかりして、ほんでいろんなもんを入れながら自分の道作りなさいっていう意味もあって。それで、やから博士 3 年の後のことをちょっと考えて、それを訓練しとけば多分、どんな成果上がってなくても将来的には伸びていくんちゃうかなっていうので そんな愛情を持ってやってます。
180R　素晴らしい。
181X　かわいいかわいいやってます。
182R　ちょっと先生の海より深い愛に。

発話番号 138X の「そこから先、うちの研究室を飛び出してもらわなあかんので」、「それを延長線上にみんなのそれぞれの学生さんの新しい領域につながるような、そういうのをちょっと意識しながら、ここから先は俺知らんでっていうか、ここまで面倒見るけどっていうようなこと、それを言うようにしてます。ダジャレを混ぜながら」との語りからは、X が学生の大学院修了後のキャリアを見据え、理念を持ち続けながら学生自身が自立できるよう、ダジャレを活用しつつ、指導を行っていることがうかがえる。それに対して、R は、141R で「本当に手厚く愛情を持って」と感想を述べ、142X で X は「愛情ありますね」と応えている。これを受け、143R で R は「愛情ある。かわいい、かわいいしていただけてる」と遊戯的ユーモアを含む冗談を言い、144X で X は「愛情あります。もうかわいい、かわいいしてますよ」と R が言った冗談を繰り返して応答している。

さらに、179X で X は「そこ（※理念）をしっかりして、ほんでいろんなもの入れながら自分の道作りなさいっていう意味もあって」、「それを訓練しとけばたぶん（中略）将来的には伸びていくんちゃうかなっていうのでそんな愛情を持ってやってます」と述べ、181X でも「かわいい、かわいいやってます」と R の冗談を再度繰り返している。R のこの冗談をきっかけに X が「愛情を持って」指

導を行っていることが語られている。それに対して、182R で R はさらに「ちょっと先生の海より深い愛に」と述べるなど、遊戯的ユーモアを含む冗談が継続的に使用されている。これらのやり取りから、インタビュアーの心理的バリアが徐々に解消されていることがうかがえる。

次に、インタビューデータ（2）を示す。ここでは、問題のある学生の特徴が「センス悪い」の一言で述べられており、「からかい、皮肉、風刺」を示す攻撃的ユーモアを含む冗談の例として位置付けられる。

インタビューデータ（2）

207R: データ、グラフをそのまま並べることを発表すると勘違いしている留学生がいるっていうふうに書かれていて、その勘違いしてる留学生に対する初期指導のエネルギーが最も必要だって書いていただいたんですけれども、その留学生に共通する特徴のようなものはございますでしょうか。

208X: センス悪い。

209R：コンクルージョンファースト。センス悪い。

210X: 多分、自分だけで終わらそうというところがあるかもしれません。ちょっと日本人の学生さんとコミュニケーションしてたら、日本人の学生さんは得られたデータをどうまとめてるかっていうのが分かるはずなんですけど、それなしに、どこのボタンを押したら、どのデータ出んねんっていうようなことだけ聞いて、それが結果やと思ってる時があります。（後略）

X は、208X で「センス悪い」と述べ、これに対して R は 209R で「コンクルージョンファースト。センス悪い」と冗談を交えて応答している。この「コンクルージョンファースト」という表現は、上記のデータより以前の発話で、X が学会発表において重要であると述べていたものであり、R がそれを踏まえて遊戯的ユーモアとして再利用している。

その後、X は 210X で、独りよがりで研究を進めてしまう留学生の問題点を具体的に指摘し、学生同士のコミュニケーションを重視していることがうかがえる。「センス悪い」というこの冗談は、X が学生の研究姿勢に対して抱く懸念を表すものであり、学生指導における課題を的確に捉えている発言であると言える。

最後に、インタビューデータ（3）を示す。ここでは、学会発表における日本語使用の推奨について語られており、遊戯的ユーモアを含む冗談の例として位置付けられる。

インタビューデータ（3）

238X: （前略）あいさつと自己紹介ぐらいはとにかくやってっていうのは、よろしくお願いしますとかいうのは。もうかりまっかは絶対言うなよっていうのは。

239R: ぼちぼちでんな。

240X: ぼちぼちでんなって返ってくるからって。そこぐらいです。（中略）ちょっと英語の初めにあいさつ、自己紹介ぐらいはできるようにしときって。そしたら審査員が点入れてくれるからなっていうふうに、一応、ニンジンもぶら下げて。

教員Xは、学会発表を英語で行う場合も、「あいさつと自己紹介、よろしくお願いします」だけでも日本語で言うことができれば、審査員の印象が良くなる可能性があると述べている。

インタビューの冒頭部分に当たる発話番号34Xでは、研究室での使用言語について次のように述べられていた。

「日本人が悪い日本語を教えますんで、もうかりまっかとかって言うたら、あいさつになるからなとか言って、そういうのもよくやってます。だから多分、研究のディスカッションは英語でやってますけれども、普通の日常会話は日本語が飛び交うこともあるような状態でやってます」

調査協力者の所属する大学がある関西地区では、「もうかりまっか」「ぼちぼちでんな」は典型的な地域特有のあいさつ表現として知られており、R は 239R で遊戯的ユーモアとして「ぼちぼちでんな」と応答している。続く 240X では、教員Xが「ぼちぼちでんなって返ってくるからって」と繰り返しており、このやり取りには、インタビュイーとインタビュアーが協働で意味を構築するプロセスの一端が表れていると考えられる。

また、X は 240X で「英語の初めにあいさつ、自己紹介はできるようにしときって。そしたら審査員が点入れてくれるからなったいうふうに、一応、ニンジンもぶら下げて」と述べており、学生の日本語使用に対する動機づけのために、冗談を交えながら指導を行っている様子がうかがえる。

4. まとめと今後の課題

インタビューデータにおいて、繰り返し語られた X の教育観を示す主な要素として「理念」「冗談」「愛情」の 3 つが挙げられる。

X は、研究の「理念」を重視しており、学生に研究の理念を反映して作成したコンセプトマップを毎週提出させ、それをもとに対話を行う習慣を形成していた。X によると、技術は年々更新されるものであるが、理念は「置き換わらないもの」である。コンセプトマップは学生の「羅針盤」になるものと位置づけられ、大学院修了後も学生自身が理念を持ち続けられるよう、長期的な自己形成を促す指導が行われていた。

「冗談」（X は、ダジャレと呼んでいる）については、X は「ダジャレを使ってしゃべらせるようにしている」と述べ、学生の心理的バリアを解消するため「冗談」を活用していることが語られていた。発言のハードルを下げることで、学生が自身の考えを自然に表現できる雰囲気づくりが重視されていると推察される。

「愛情」については、心理的安全性（Edmondson, A. 1999）を担保し、教育の中核を成すものであると言える。インタビューデータ（1）では、R の冗談をきっかけに X が「愛情を持って」指導を行っていることが語られた。

以上、限られた例ではあるが、教員への相互行為としてのインタビューを通じて「理念」「冗談」「愛情」が互いに補完しあう教育観が明らかになった。これらの要素は、学生との信頼関係を築き、学生の自立支援を促し、心理的安全性を支える基盤として機能していることが示唆される。

また、留学生へのサポートは、教育理念、心理的安全性、言語面での配慮が融合した複合的なプロセスとして捉えることができる。本稿は一名の教員の事例研究として位置付けられるものであるが、このようなモデルケースとなる教員の語りを共有することにより、理工系研究室における留学生サポートの質的向上に寄与する可能性がある。今後の課題として、留学生および他の研究室構成員の語りを収集し、相互的な関係構築の視点からさらなる分析を進めていく必要がある。

＜付記＞ 本発表は、JSPS 科研費 22K13145 の助成を受けたものである。

参考文献

居關友里子・生天目知美（2023）「理工系研究室におけるコミュニケーションの実態－交感的コミュニケーションに注目して－」『専門日本語教育研究』第 25 号，pp.27-34

上野行良（1992）「ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類について」『社会心理学研究』7-2, pp.112-120

重田美咲（2008）「工学系大学院留学生の「正統的周辺参加」と日本語学習，広島大学大学院教育学研究科紀要，57，pp.255-262

福良直子（2024）「留学生によるアカデミックプレゼンテーションに対する理工系研究室におけるサポートの実態」『専門日本語教育研究』第 26 号，pp.11-18

ホルスタイン、ジェイムズ・グブリアム、ジェイバー（2004）山田富秋他訳『アクティヴ・インタビュー: 相互行為としての社会調査』せりか書房（Holstein, J. A., & Gubrium, J. F. (1995). *The active interview*. Sage Publications.）

村岡貴子（2003）「日本の理系大学院で学ぶ留学生の専門日本語コミュニケーション」『社会言語科学』第 6 巻第 1 号，pp.99-111

やまだようこ（2006）「非構造化インタビューにおける問う技法 -質問と語り直しプロセスのマイクロアナリシス」『質的心理学研究』 6，pp.194-216.

Edmondson, A. (1999). Psychological safety and learning behavior in work teams. *Administrative Science Quarterly, 44*(2), 350–383.